

総括討議では前日の打合せの結果にもとずき筆者がオリエンテーションとして参考業務内容に対する共通理解の必要性和、現状では相互協力を何からはじめることができるかについて考える必要のあることをのべたが、この点があまり発展的に論じられず、残念であった。しかし反面研究集会の在り方として参加範囲の拡大や小人数による分科会の必要性が論じられたのはつぎの研究集会に対する1つの収穫であった。

3. 研究集会の在り方について

以上今回の研究集会の概要と感想、意見をのべたが、さいごに今後の研究集会の在り方について意見をのべたい。

(1) 研究集会でとり上げたテーマに対する本質的な問題提起と討論が必要である。

(2) 日程の中に規模別乃至問題別分科会を設け、集中的で密度の高い討議をおこなう必要がある。

前者についてはとかく研究集会でしばしばみられる傾向であり、今回も発表に対する質

疑、おねがいが比較的目立ったが、今回のテーマである「参考業務における相互協力の促進について」もっと各館からの具体的な問題提起と本質的な討議がほしかったと思う。

後者については前者とも関連あることであるが、100人以上という大世帯のため、発言機会が充分でなく、より多くの参加者の意見が反映されなかったようである。これを是正するにはやはり日程の中で規模別乃至問題別に小人数の分科会を設けることが1つの解決策のように思われた。事実参加者の中には第2日目の問題別懇談会がきわめて有意義であったとのべていた人、あるいは今後分科会を考えてほしい旨発言した人があったことからこのようなことがいえると思う。しかし以上の注文はいわば望蜀のねがいともいうべきもので、今回の研究集会は全体として主催者の一員である国立国会図書館の周到、率直な準備、運営により、出色の研究集会であった。

(きたじま・たけひこ：東京学芸大学助教授)

「参考書誌学」への期待

小林 宏

わが国の図書館（特に公共図書館）における参考業務の定着の過程を、最近必要があったに検討する機会をもったが、たまたま今回の研究集会に参加して、わが国でもようやく図書館の基礎学としてのビブリオグラフィ（参考書誌学）への認識が深まったことを感じとり、今後、書誌を中心とする最もオーソドックスな（しかも実は従来、末梢的な補助ツール作成などの付随業務に没念して、ゆるがせにされてきた）最も図書館らしい業務の伸展が期待できる気持を抱かされた

ので、その気運醸成の願いもこめて一言述べてみたい。

一九五二年、第一回の公共図書館研究集会に「レファレンス」がとりあげられ、その定義の模索から始められた、開拓期特有の熱っぽい学習の雰囲気は、この仕事こそ日本の図書館に新生面を開いてゆくであろうという確かな手ごたえと、張り合いを、当時の図書館員たちが感じとっていたからであろう。「森羅万象」の諷い文句は大袈裟ではあったが、しかも窓口に寄せられる具体的な質問の増加

とその多様性は、一般市民と図書館との接近の度合いを象徴するものであった。既成の図書館資料で消化しきれない質問を抱えこんで、各館が自館作成ツール(補助ツール)に浮き身をやつしたのもこの時期であった。レファレンス・サービスが県立クラスの図書館や大きな市立図書館において、最も意欲的に推進されたのは、中小図書館では資料や人的余裕に欠けていたからということもあるが、県立の場合、第二線図書館の名分に最もふさわしい性格の仕事として納得もいき、やり甲斐もあったからであろう。

しかし「シミ抜きの方法」とか「郷土料理の由来」等に類する、よろず相談的な質問を表看板に、広く一般市民の各層にレファレンス・サービスの普及化を進めながらも、この仕事の直接担当者たちは、肝腎の最も図書館資料を必要とする本格的な研究者たちの要求に対しては、自館の蔵書の貧弱さを常に嘆かなければならなかった。相互協力の必要を叫び、相互貸借規程を設けたりしてみても、似たりよつたりの貧弱な蔵書構成の図書館の間におけるそれは、おのずから限界があった。そうした活動の前提となるべき書誌の不備も致命的だった。いきおい、何でも彼でも国立国会図書館に依存することになる。県立図書館と名がつく施設なら当然所蔵してあるべき筈の資料を、恥を忍んで貸出依頼するつらさを、味わったことのない参考司書は少ないことだろう。そしてレファレンス・サービスにおける未解決問題について検討を重ねてゆく過程で、その最大の原因は資料(蔵書)そのものの貧しさにあり、それに拍車をかけるものが書誌の不備であり、更にその根底に書誌に関する学問の欠如があることを痛く気付かざるを得なかったのである。巷間いわゆる「書誌学」というものは、これと全く無縁である。日本にはビブリオグラフィー(参考

書誌学)がないのである。当然あって然るべき書誌がないことも、このことの結果でしかない。例えば民間の出版社による「国書総目録」が刊行されてから、始めて、これが当然一国の国家的書誌編さん事業として、とうに実現されていて然るべきであったことに気付かねばならなかったこと。一出版社の偉業をたたえるよりは、図書館関係者には胸痛み心苛まれる事実である。現在、県立クラスの図書館が、四苦八苦しながら、思い思いに作成している補助ツールと称するものなど、殆どこれら書誌の不備を補うための「あがき」にも似た作業が多い。例えばく幕末、明治初期の外国人の目に写った日本>について調べるために、日本関係の外国語文献を、それぞれの図書館で目録化したり、<外国語に翻訳された日本の文学作品>などについても、同様の労力が払われている。自分自身でリストアップすることは勉強にもなるし、暇さえ与えられるならば一種の楽しみにもなり得るが、能率や書誌調整の立場からは不経済な労力の空費であろう。

今回の研究集会は、その会場館である国立国会図書館の用意して下さった資料によって、はからずもその書誌編さん計画の一端を知ることができた。それはまことに偶然的にであって、一国の国立図書館が国家的責任で編さん刊行する十年位先までの書誌計画が練られている様子とは受けとれなかった。このことについては研究討議の際にも、一国の書誌編さん刊行に当っては、図書館界の希望や着想、必要性などを汲みとって、立派な書誌計画をたてていただきたい旨も含めて注文申しあげたので、特につけ加えることもない。ただ書誌の編さん刊行は、多大の経費と労力を要するものであるにもかかわらず、その意義と価値を評価する度合いが、わが国ではあまりにも低すぎることを、我々図書館関係者

の責任も含めて痛感している。書誌は通読されるためのものではないが、古典的述作とともに肩を並べて名著として高い評価を受けている彼の、ジョセフ・マリー・ケラールの「フランス書誌」、或いはポール・ヌヴェーの「地方図書館の財宝」、レオポール・ドリルの「国立図書館蔵書総目録」（もちろん彼一人の仕事ではないが）等々の例をひくまでもなく、ビブリオグラフィーに光栄ある座を用意することを知らなかったわが図書館界に、百年の遅れと未熟が胚胎するのであろう。

わが国の公共図書館界に根強く残っている「現物主義」——自館の所蔵資料のみで勝負をしようとする——は、書誌への不信、というよりは、書誌を使いこなすことを知らない

ビブリオグラフィーの欠如に根ざしている。複写技術の発達と普及は、この現物主義をますますナンセンスなものとし、逆に書誌を駆使して自館にない資料も自館蔵書と同様に複写入手して使いこなす参考司書の技量に貴重な値打ちを与えつつある。そのテクニックまで包含し、参考文献に関する知識を磨き、書誌への通曉、書誌編さんの能力をもつ真の、「書物を司る人」を養なうビブリオグラフィー（参考文献学、または参考書誌学）が、わが国にも確立される日の一日も近いことを切望して、この研究集会の感想を締めくくりたい。

（こばやし・ひろし：栃木県立図書館）